

文型からコミュニケーションに至る方法と コミュニケーションから文型に至る方法

山崎直樹（関西大），植村麻紀子（神田外語大），
鈴木慶夏（釧路公立大），
中西千香（愛知県立大），西香織（北九州市立大）

日本中国語学会北海道支部例会
(釧路公立大学, 2015.09.11)

- 『外国語学習のめやす』とは何か
- 外国語の学習における言語使用の4つの段階
- 2つのアプローチ (G to C, C to G)
- それぞれの問題点
- 文型リスト
- C to Gの利点

『外国語学習のめやす：高等学校 の中国語と韓国語教育からの提言』

- 外国語を使って、「社会において何らかの課題を解決し、新しく人的関係を構築することができる」能力の育成を目標とした学習の指針

特徴

- **標準Standardsの提示**
- **15の話題領域における **コミュニケーション能力指標****

コミュニケーション能力指標

- 自分の話す学んでいる言語についての相手の評価を、聞いて理解できる。【ことば】
- 自分の住んでいる町や都市の、有名な場所や食べ物などを、言うことができる。【地域社会と世界】
- 普段持ち歩いているものや身につけているものについて、会話できる。【日常生活】

求められる言語能力

(レベル1の例)

- 自分が想定している範囲で、基本的な言い回しを使って、相手の協力を得られれば簡単なやりとりができる。
- 自分にとって身近な事柄について、短い語句や文で表現することができる。
- よく耳にしたり目にしたりする語句や文のうち、ごく基本的なものを理解することができる。

外国語学習の目的

- コミュニケーション能力の獲得
- 「使う」こと

外国語の学習における 言語使用の4つの段階

- Step 1: 語彙を文法規則にあてはめて「**構造**」を訓練する段階

外国語の学習における 言語使用の4つの段階

- Step 2: 「尋ねる」「頼む」「紹介する」などの
「機能」を訓練する段階

外国語の学習における 言語使用の4つの段階

- Step 3: 「土産物屋でその土地の名産品が何かを尋ねる」「留学生に中国語を教えてくださいと頼む」「日本のことをよく知らない中国人に自分の住んでいる町を紹介する」など「**社会的関係を考慮した言語使用**」を訓練する段階

外国語の学習における 言語使用の4つの段階

- Step 4: 「実際に中国の特定の都市に行き情報を収集して名産品を手に入れる」「学内の留学生と交渉し、言語交換をする約束を取り付ける」「自分の住んでいる町を紹介するビデオを作成し、姉妹都市／提携校に送り、交流する」など、何らかの課題を解決したり、新しい人間関係を構築するなどの「**社会における成果**」を手に入れる段階

2つのアプローチ

- G to C: **Grammar & Goi** to **Communication**
- C to G: **Communication** to **Grammar & Goi**

G to C

- Grammar & Go to Communication
- 語彙と文法を導入し、機械的なドリル式練習をして、そこからだんだんと〈使う練習〉へとシフトして行き、最後に、学習した項目を使って〈ちょっとした会話〉（コミュニケーションの訓練のつもり）をする。

C to G

- Communication to Grammar & Goi
- 「どのようなコミュニケーション能力を身につけさせたいか、それによってどのような「社会的な成果」を得させたいか」を目標にし、そこから、「教室でどんな活動をするか」「どんな知識を学習項目として与えるか」を設計するアプローチ

G to Cの問題点

- ハンドアウト(p.2)をご覧ください。ある教科書の第1課と第2課の学習項目です。

- これらの学習項目をすべて「使う練習」にまでもっていけるか？
- それらの「練習」はテーマ的に統一された活動か？
- それらの「活動」はほんとうのコミュニケーションにどこまで近づいているか？

真のコミュニケーション

1. 具体的な場面・役割がある。
2. ことばのやりとりをする目的がある。
3. 自分と相手の間にインフォメーションギャップがある。
4. その話題を自分の問題として考えられる。
5. その話題の向かう方向を自分で選択できる。
6. 創造的なやりとりができる。
7. 常にメッセージの意味を考えている。
8. 相手が言っていることが理解できているかどうかを確認する手段、および、自分が言っていることが理解されているかどうかを確認する手段がある。

C to Gの問題点

- どのような文型や語彙を使用するかは、教師の裁量による。 > 教師の負担の増大。
- 学習者のもつ構造に関する知識がクラス間で異なる。
> 学習者の「受け渡し」に問題が生じる。

C to Gのための句型リスト

- ハンドアウト(p.3)をご覧ください。

C to Gの利点(1)

- ある**言語形式の不在**をどう導入するか
- 例：過去の習慣を表現するときには“了”を使わない

以前，我们常常去瑞士滑雪。

言語活動から言語表現を 引き出す

- 「こどもの頃、あなたが家族とよく行った場所を教えてください」
- 「○歳のときできなかったことで、今ではできることを教えてください」

C to Gの利点(2)

- 言語の創造的使用と語用論的なピジン化は紙一重、
インプットには要注意
- Google Politeness

「負の転移」をどう避けるか

インプット	類推から生じたアウトプット
我爸爸不让我去留学。	我的钱包不让我去留学。
我会开飞机。	钏路公立大学会学习经济。
有笔吗？	有菜单吗？

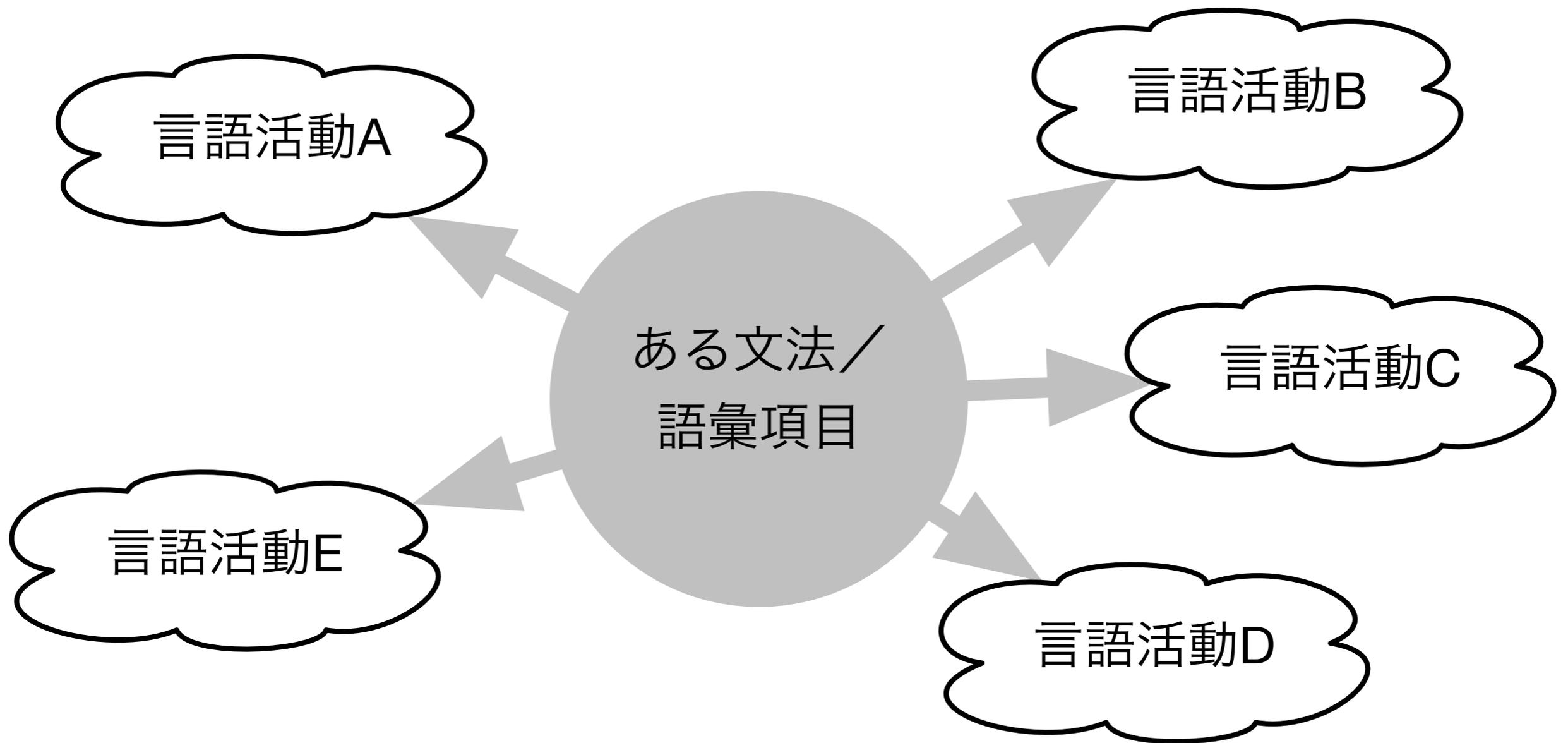
C to Gの利点(3)

- 学習者も「**関連性**」を求めている

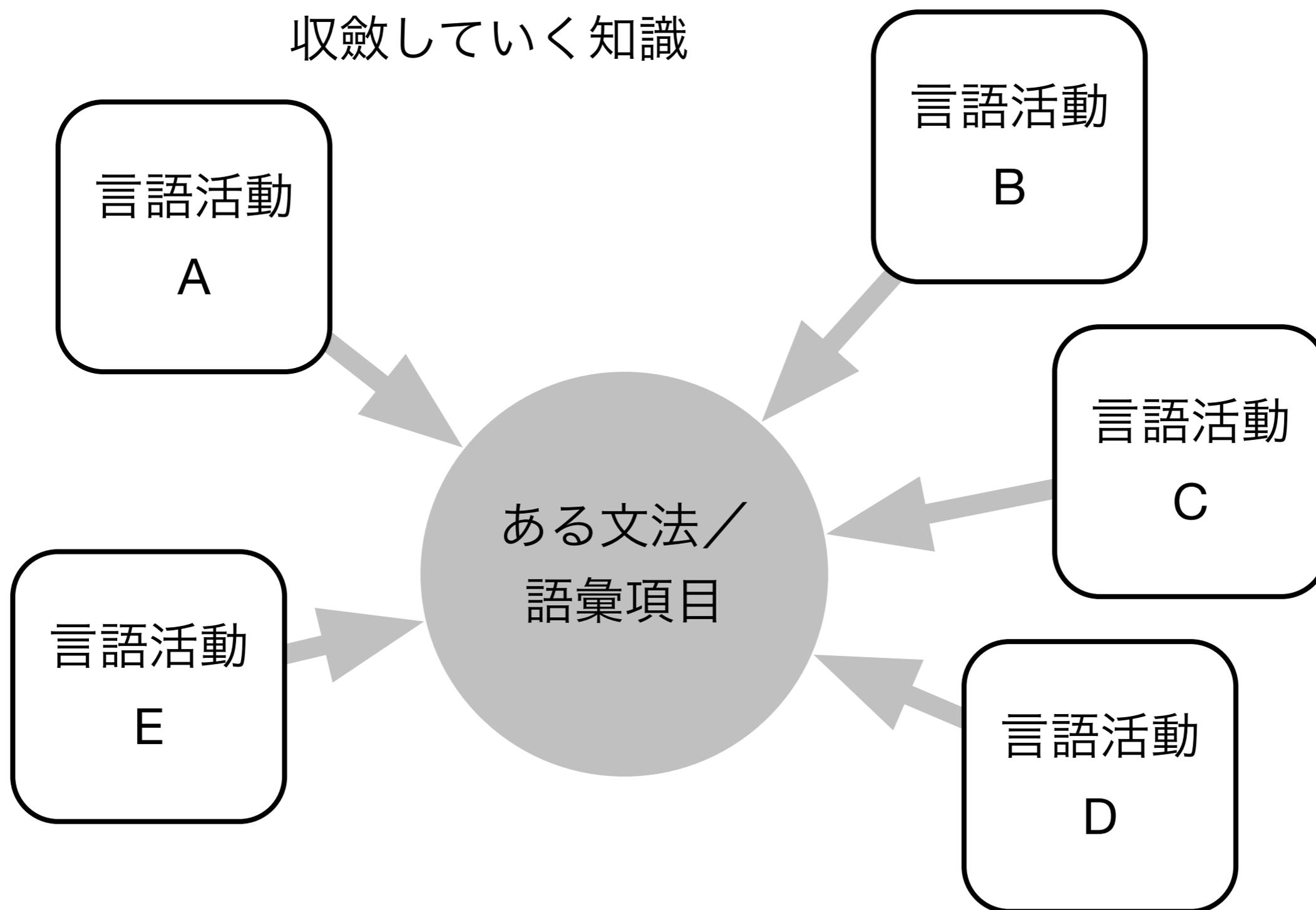
関連性がないと覚えられない

“几”の例文として“你家有几口人？”你要几个？“が続けて並んでいたところ、ある学生が後者を「お子さんは何人ほしいですか？」と訳して……

拡散していく「発展・応用」



一貫したテーマ、場面、役割、目的の下で
収斂していく知識



- 「言語の構造に対する知識の習得」と「コミュニケーション能力の育成」は**対立しない**
- 「コミュニケーション能力の育成」をゴールにするアプローチは「言語の構造に対する知識の習得」に対して、実は**効率がよい**